

## \* \* 「さえ」と「すら」について \* \*

「さえ」と「すら」は、両者とも否定文の形で、極端な状況を示すことによって、同種の状況や動作・行動がまったくないということを表します。

- (否定文) ジョンさんは漢字どころか、ひらがなすら書けません。  
ジョンさんは漢字どころか、ひらがなさえ書けません。

但し「すら」は、後件が肯定文の場合は、現代語としては不自然に感じられます。

- × ジョンさんはひらがなどころか、漢字すら上手に書けます。  
× 寒いだけでなく、雪すら降って来た。

一方「さえ」が肯定文で使われると、極端な状況を示すことによって、その程度状況が並でないことを表します。

- (肯定文) ○ ジョンさんはひらがなどころか、漢字さえ上手に書けます。  
○ 寒いだけでなく、雪さえ降って来た。 (明官富久雄)

[参考文献] 『続・基礎表現 50 とその教え方』 凡人社

## \*\* 「は」と「が」の使い分けについて \*\*

「は」と「が」に関する参考書は多いですが、何れも「は」は旧情報、「が」は新情報を表すと書いてあります。しかし学習者にそんな用語を使ってもわかってもらえません。そこで、「話者が相手に伝えたいことは何か」「大切なことは何か」に注目しながら次のように説明するほうが、教える側も、教わる側もわかり易いと思います。この説明は、「話者が相手に伝えたい大切なこと」が文のどの部分にくるかということに注目しながら進めていきます。

(I) 伝えたい大切なこと(知りたいこと、知らせたいこと)がくるのは、

- A. 「は」の後
- B. 「が」の前

例1 「今日の試合では、どのチームが勝ちましたか。(勝ったのはどのチームですか)」「大正大学が勝ちましたか、昭和大学が勝ちましたか」「明治大学は勝ちましたか、負けましたか」

例2 (写真を見ながら)

- a 「この方、お母さん?」
- b 「ううん、それはおば。こっちの笑っているのが母」

下線(二重線)で示したように、「は」「が」で文を前後に分けると、伝えたいことは「は」の後、「が」の前にあることがわかります。これが未知の新情報で、前後逆にあるのが既知の旧情報です。

一方、前提や既知のことがなく、その文全体を新情報として出す場合があります。

(II) 伝えたいことが文全体である場合

- A. 出来事、状況をそのまま述べるときは「が」
- B. 変わらないこと、習慣、性質をいうときは「は」

例1 「神戸で地震が起きた」  
「地震はいつ起きるかわからない」

例2 「戦後、女性が強くなった」  
「いつの世でも、女性は強い」  
「が」は現象文に用いられ、「は」は説明文に用いられます。AとBがそれです。

最後に、初級で導入される「存在文」の文型で確認してみましょう。

- ①机の上に本があります。(注) 事実を伝えています。文全体が大切です。(II-A)
- ②本は机の上にあります。(注) 伝えたいことは「机の上にある」です。(I-A)
- ③本が机の上にあります。(注) 「本」が強調されています。(I-B)

[参考文献]月刊『日本語(日本語教育何でも相談)'99.05』アルク  
(明官富久雄)